



1月24日の礼拝後に横浜港南台教会の東日本大震災支援委員会と教会のボランティア団体の「麦の会」の共催で「ひとり人形劇がらくた座」の公演がありました。私は「麦の会」の会長雅子さまから誘われていて、この日を楽しみにしておりました。「麦の会」は東日本大震災の被災者、被災地を、支援するNPO法人を設立し、被災地訪問、交流、現状の報告、物資購入などをしながら、活発に活動を行っています。いつも「麦の会」の皆様のご活躍には頭が下がります。今回は「ひとり人形劇がらくた座」の木島知草さんを招いて、楽しい人形劇、愉快なトーク、すてきな音楽、心に響くメッセージを聞くチャンスが与えられました。

木島知草さんは松本市在住で45年間「ひとり人形劇がらくた座」を主宰してこられたパワフルでキュートな女性です。若々しさが光っていました。彼女は捨ててしまうような、ガラクタを再生させて、人形に生まれ変わらせ、人形を通して、メッセージを伝え続けてこられました。そのメッセージとは「命の大切さ」、「人と人のつながりの温かさ」、「人の苦しみに思いやりを」だと感じました。

トークで、自己紹介された後、私たち聴衆に、「いい子、いい子と、両手で自分の頭を撫でてごらん、ほんとうにいい子なんだもの」と体を動かしながら、自分を大切に思う気持ちと呼び覚ましてくれました。ダンスで笑いこけさせ、隣に座っている人の肩もみなど、一人一人が、優しく触れあう心地よさを体感させてくれました。言葉では理解しにくい思いをどのように伝えていくか、心を柔らかにし、目、表情、しぐさに思いを込めることを知らされました。いよいよ舞台の幕開けです。一人で演じてい



るとは思えない人形の切れのある動き、声の幅に驚きます。そして言葉のやさしさがよく伝わります。演目は「エイズ・キャリアの友になる」でした。幻燈で影絵のシルエットも加わり、味わい深さ、懐かしさが増しました。



知草さんは幼いころに、楽しみと言えば、町から町へやってくる「紙芝居」だけで、追っかけをして、夢中になって付いていくうちに迷子になってしまったそうです。紙芝居のおじさんが彼女を見知っていて、町に連れ帰ってくれた時、その温かさ感激しました。これらが人形劇を始めた原点とのことでした。彼女は、人は違いがあっても、それを乗り越えて、理解しあって共に生きていく大切さを、小さい時から学ばなければならないと思い、人形に語らせています。知草さんは東日本大震災の被災者に物的支援はあまりできないけれども、人形劇で楽しい場を持っていけると、何度も被災地訪問をされました。「麦の会」のメンバーとそこで出会ったというわけでした。

知草さんは性差別だけではなく、貧困、病気、障害、災難などで差別を受けている人々の活動ともリンクし、幅広く活躍しておられます。連れてきた二人のお孫さんが太鼓をたたいて、彼女のギターに合わせ、みんなで笠木透氏作詞/作曲の「私の子どもたちへ」という歌を歌いました。福島原発の被災地、被災者を思い、大切に、素朴な自然を思い、心が震え、思わず涙ぐむ人もおりました。

1. 生きている鳥たちが 生きて飛び回る空を あなたに残しておいてやれるだろうか 父さんは (母さんは) 目を閉じてご覧なさい 山が見えるでしょう 近づいてご覧なさい 辛夷(さし)の花があるでしょう
2. 生きている魚たちが 生きて泳ぎ回る川を あなたに残しておいてやれるだろうか 父さんは (母さんは) 目を閉じてご覧なさい 野原が見えるでしょう 近づいてご覧なさい 竜胆(りんと)の花があるでしょう
3. 生きている君たちが 生きて走り回る土を あなたに残しておいてやれるだろうか 父さんは (母さんは) 目を閉じてご覧なさい 山が見えるでしょう 近づいてご覧なさい 辛夷の花があるでしょう